

春と秋は各地で規模の大きな展覧会が開催される。この原稿を11月に書いているが、奈良では秋に恒例の正倉院展が今年も開催され、年々入館者数が増えている。これ以外にも、今年は琳派誕生400年を記念して、京都国立博物館で琳派の作品を一堂に会した展覧会が話題になっている。このような大がかりな展示でなくても、「博物館や美術館に行くのが疲れるから…」という声をよく耳にする。それはなぜか？ このことを含め、今回は博物館や美術館の展示の鑑賞について私なりの意見を述べたい。

(理由その1) 距離

当然だが、展示を見るということは歩き回るということである。美術館は比較的開放的な展示空間だが、博物館では展示ケースが入り組んで配置されている場合が多い。展示室一室の面積が200㎡、壁面ケースの長さが13m、それが展示室の両側にあったとして×2で26m、さらに中央に一辺3mの独立ケースが3台あったとしたら周囲を巡って12mの×3で36m…。このように考えていくと途方もない距離を歩くことになる。参考館(以下、当館)の総展示面積は1階から3階まで合わせて2,463㎡あり、展示を綿密に辿っていくと実に1kmに及ぶ。これはほぼ天理駅から天理教教会本部までの距離に相当する。

(理由その2) 照度

博物館、美術館では資料、作品保護の観点から照度を落としている。薄暗いなかで目を凝らしてガラス越しの資料を鑑賞し、視線を落としてその横のキャプション(資料についての解説文)を読み、なるほどそういうことかと納得して再度資料を確認するために首を上げる、この繰り返しが相当目の負担となるのは事実である。

(理由その3) 未知との遭遇

博物館を訪れる目的は、今まで知らなかったモノを深く理解するため、知的好奇心を満たしたいという思いからが多いのではないだろうか。展示を鑑賞することは、堅苦しくない学習、モノとの対話であるとそれほど深刻に思っていないくても、実際頭の中では未知なるものを定着させようと激しく活動している。薄暗いなか長い距離を歩きつつ全ての情報を吸収しようとすると脳は疲労するものである。

では、対策をどうすればよいか。(理由その1) この対策は明快で、歩きやすい靴に限る。手荷物はロッカーに預け、メモとえんぴつだけ手にして身軽に展示をご覧いただきたい。ヒールがある靴は、疲れるだけでなく、周囲に音が響くのが気になっでぎこちない歩き方になってしまうので避けた方が望ましい。

(理由その2) これについては館の立場から申し上げることをご容赦いただきたい。博物館、美術館の資料は繊細で光の影響を受けやすいものが多く、この先千年を超えて次世代に伝えていくためには、安定した状態で保存を続けなければならないからである。単に保存するだけなら、温湿度管理された収蔵庫に入れたままにしておくのが最良だろうが、これは博物館の使命に反する。社会教育法に基づき、1951年に公布されたわが国の博物館法第2条において、「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーシ

ン等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」(下線筆者)が博物館だからである。ただ、学芸員の立場から申し上げるのは抵抗があるが、キャプションは無理に読まなくても支障ない。目の前に並んだ実物をこそ、じっくりとみつめていただきたい。何千年も前の中国の王朝で、皇帝だけが目にしたものが眼前にある、あるいは天才画家がキャンパスに向かったのと同じ位置から作品に対峙する。これこそ博物館、美術館を訪れたこの瞬間にしか味わえない醍醐味で、その資料がどのような使われ方をしたのか、材質は何か、は後から図録を読めば事足りるのである。そうは言っても学芸員が一番魂を込めて作成するのがキャプションなので、出来れば読んでいただけたらこれに過ぎる喜びはない。要は全資料の全文を丹念に読んでいくと、肝心の資料に最後まで注力できないということである。心惹かれる資料に巡り会ったら、一期一会の運命を感じて、ひたすらそれだけじっくりと鑑賞するのもお勧めで、手にしたメモに感じたことを書き留めておくとも後々調べるのにも有効である。

(理由その3) は、その2とも重複するが、その展示の全資料を吸収しようと欲張らないことだろうか。例えて言うと、その展示に並ぶこの資料だけを見るためにこの展覧会に行くという気持ちで出かけるのがよいのではないかと私は思う。そう思っても、結局は関連する資料が並んでいるので、その資料だけではなく周辺の色々な知識を吸収することができるものだ。それから一人で行くこと。よほど興味関心が同じで、気の合う人でない限り、鑑賞するペースが乱れてしまう。話しかけられて集中できないということにもなりかねない。展示室内での行動は別々で、出口で合流してそれぞれ感想を述べあえば、さらに視点が広がるだろう。それからしっかり食べてから博物館に行くこと。経験上、血糖値が下がった状態では絶対集中できない。

以上、なにやら一方的な書き方になってしまったが、これはあくまでも私の一意見で、それぞれご自分の博物館、美術館の楽しみ方を見つけていただきたい。ワクワク感を持って訪れるのが一番大切である。

そして、「〇〇年ぶり」や「初公開!」といったテレビ局や新聞社後援の大型展覧会だけではなく、身近な展示にも足を運んでいただきたい。当館は管内学校生徒、職員、天理教につながる人々、一般の方々に広く開放している。堅苦しく思わず、



当館1Fに展示されたオルメカ石頭像を長時間見つめる幼児(2015年8月22日)

お気に入りの「グデア頭像」(3階世界の考古美術展示室)の顔を一週間に一度見に来る、毎日中国の「風車」(1階世界の生活文化展示室)を吹く力で元気のバロメーターを計る、民家ステージの囲炉裏端(2階世界の生活文化展示室)に座って少しの間ぼんやりする等々、ぜひお気に入りの一品を目当てに、いや自分のお気に入りの「参考館に預けている」つもりで通っていただきたいものである。